

「文化」のカ・その2(スポーツ)

企業経営漫談士 岡野実空

「芸術」に続き取り上げるのは、「スポーツ」。それは純粋の「文化」とは言えないまでも、私たちの日常生活に深く入り込み、それに準ずるものとして、さまざま場や話題を提供しています。またその発展に伴い、共通の理解を得やすい「事例」や「教訓」として、実業にも大きく貢献しています。それらを踏まえ今回は、組織ミドルの「スポーツ」との付き合い方を「心技体」の3側面から考えます。

その1: 心「遊び」

スポーツの効用は、まず何と言っても「遊び」の要素をたっぷり含み、楽しく「気分転換」できること。自ら体を動かすだけでなく、各種メディアの発達のおかげで、それを観賞する機会も増え、心身の健康維持に欠かせない存在となっています。コロナ禍は、それを改めて実感する機会となりました。

また時計会社に就職し、スポーツを「仕事」にした人たちと接する機会が多かった私は、それを「遊び」に止める意義を人一倍痛感することになりました。一流選手というごく一部の例外を除き、それを「仕事」にすると、大半の人はスポーツを純粋に楽しむことができないばかりか、逆に苦悩や苦痛の要因になっていたからです。

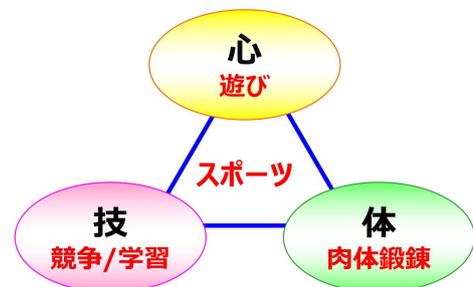
因みに、かつて西ドイツのベッケンバウアーが初来日し、サッカースクールを視察した折、指導者たちにまず苦言を呈したのは、「遊び」としての「楽しさ」を少年たちに体感させていないことでした。

その2: 技「競争／学習」

次にそこで「皇帝」が指摘したのは、子どもたちにいきなり「チームプレー」を教える愚。初心者に教えるべきは、基本となる正しい「個人技」だからです。その両輪が、習得への「努力」と、自分の頭で考える「工夫」を生み、いずれ「競争」の際に必要な「チームプレー」につながるのです。

新社会人の育成という美風が残る我が国の組織の場合、それは決して他人事ではありません。システム化した現代社会で生きるためには、自組織に適應する基本の習得は必要条件にすぎず、他組織とも協働できる汎用性の高い「個人技」の体得が十分条件になります。そしてそれらを統合する「マネジメント」の優劣こそが、組織の存続を決めるからです。経営環境が刻々変化し、「経営」に関係する科学的な知見が続々と明らかになるいま、「競争」をつうじて一試合ごとに強さを増す、「学習する組織」の要は、もちろん皆さんミドルなのです。

Z-13 「スポーツ」の力



その3: 体「肉体鍛錬」

ローマの詩人ユウェナリスの願望に過ぎなかった、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」。それを曲解し、スローガンとして悪用した近代の軍事国家。それはスポーツの世界に引き継がれ、そこでも歪んだ「精神論」を生み出した。そのベテラン勢の言動を見聞きするたびに、我が国では、それがいまだに尾を引いていることを実感します。

一方で気になるのが、プロスポーツの動向。さまざまな科学技術の導入は、各競技の「戦略」や「作戦」を飛躍的に進歩させたばかりでなく、選手の「肉体」にも及び、最早「鍛錬」を乗り越えて「改造」レベルに到達しています。その何よりの証は各種の「新記録」ラッシュですが、同時に「故障者」激増という皮肉な結果も惹き起こし、その行き過ぎを露呈しています。さらにもっと気がかりなのは、そのアマチュアへの波及。特に若年層の「心技体」のバランスを欠く肉体「改造」を見るにつけ、その指導者たちの良識を疑うばかりです。

以上のように、実業の世界に身を置くミドルにとって、「スポーツ」は心身の「健康」に役立ち、各種の「競争」の代替になるばかりか、さまざまな「学習」にもつながる優れたもの。「人類最高の発明」という賛辞もある中、今回コラムの総括として挙げる「教訓」は、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」!

2021年3月22日 実空